

立原道造の所謂日本浪漫派接近初期相

「芳賀檀氏へ」まで

大森郁之助

立原道造晩年の〈日本浪漫派〉接近、という一項目は、立原を体系的に論じようとする場合欠かせないものになっているようである。しかしその〈接近〉について、それを是認するか批判するかという、言ってみれば十人十色になり得、かつ何千何万語を費して討論しても決着がつかずとは限らない事柄ではなくて、例えば、何年何月頃からどういう形で、又どの程度の同調連繫なのか、といった、明確にし得る筈だし又しなければ話が始まらない筈の基本デエタが、じつは余りはつきりせず、亦はつきりさせようと努められもしない仄、観念的或いは感情的論議のみ突っ走っているように思われる。

一例を挙げれば、右に並べた中でも最も見極め易い筈の時期の問題について、——日本浪漫派と聞いた途端にいきり立ってしまう（乃至、そうしないと具合が悪いと思っている）らしい人々とは違い、条件付きで「日本浪漫派のカテゴリ」に入れられもする（小高根二郎氏「日本浪漫派とは何か」、『解釈と鑑賞』昭54・1）雑誌第二次『四季』の、それも「『コギト』等との著しい同質化が行われはじめ」（成田孝昭氏「同人雑誌と堀辰雄」、『国文学』昭38・7）「実質、日本浪漫派の植民地」（小高根氏、同前）とする説さえある最晩期の執筆メムバアだった鈴木亨氏に（さえ）、次の様な解説がある。

立原が「日本浪漫派」に接近するのは、昭和十三年一月末、芳賀檀から『古典の親衛隊』を贈られて感動し、（略）礼状を芳賀に出すあたりからである。この書信は、そのまま「日本浪漫派」の三月号に掲載された（引用者注、表題「芳賀檀氏へ」）。／「オメガぶみ」は、その二月に「コギト」に発表されているのだが、まだここには「日本浪漫派」の氣息は感じられない。

（「立原道造と三島由紀夫」、『ユリイカ』昭46・6）
『コギト』掲載作が『日本浪漫派』の氣息を感じさせないことを殊更記すのは鈴木氏も『コギト』をエッセイとしての日本浪漫派という意味で同類項視する故だろうが、そのような同類項誌に既に（二月号掲載だから当然一月末の『親衛隊』受贈以前に）原稿を与えていても、その作品本文に浪漫派の「氣息」が感じられない限り浪漫派への「接近」ではない、とする立場だろうか。それならば本物の浪漫派接近といえる本文自体浪漫派風な作品が、「オメガぶみ」以後に無ければならないが、観念がそのまま、かつそれだけで作品を構成し得る評論類（そこには確かに浪漫派の口調が顕著だが）以外には、どれをそう見るのか。

或いは又——右の鈴木氏文でも明らかな様に立原は『日本浪漫派』への寄稿よりも『コギト』へのそれの方が早かった訣で、単に時間的先後に止らず関係の質的深淺に亘って（？）「立原が（略）保田與重

郎らの『日本浪漫派』グループに近づき、『コギト』に拠ったこと」云々（安東次男氏「詩人の境涯」、昭34・4ユリイカ刊『中原中也研究』）と言われたりするのには、エコールとしては日本浪漫派と汎称すべき中で雑誌名でいえば『コギト』が立原の具体的（接近）相手、という意だろうが、それなら『コギト』への集中とはどの程度、かつ、どんな性質のものだったのか。

まず手のつけやすい所から立原の『コギト』『日本浪漫派』への執筆状況を対照表示すると、次の様になる。

『コギト』（創刊昭7・3〜終刊19・8）

昭10・9月号 風に寄せて

11・1 憩らひ

11・2 夏花の歌

11・9 かるやかな翼ある風の歌（物語）（一）

11・11 同 右（二）

12・3 ひとり林に……

13・2 オメガぶみ（物語）

13・9 風に寄せて

13・12（松下武雄
追悼特集） 魂を鎮める歌

『日本浪漫派』（10・3〜13・8）

昭13・3（『古典の親衛
隊』特集） 芳賀檀氏へ（感想）

『浪漫派』へはこの一回きりで、しかも前引鈴木氏文にもある通り芳賀への個人的礼状を編集サイドの要望により転用を承諾した（昭13・2・2付杉山美都枝氏宛書簡に「古典の親衛隊への私信を浪漫派におのせになる由（略）適当に御取計らひ下さい」とある）ものであり、立原の側の意識としては通常の寄稿とは差があった筈である。

立原の側からの寄稿の繁閑に対応するものとして十四年三月立原病歿の際の雑誌の側の処遇を見ると、『コギト』では四月号に田中克己

が「哀歌——立原道造に——」（詩）を掲載した他編集後記で弔意を表し、翌五月号では伊東静雄が「詩一篇」（無題、のち詩集『夏花』で「洙雪——立原道造氏に——」と題す）に「久振りに偶々成つたこの歌を、わが記念に、故立原道造君に捧げようと思ふ」と詞書し、田中が「立原道造の思ひ出」（回想）を載せている。一方、『日本浪漫派』の方は既に終刊後で雑誌としての対応は比較し様もないが、十四年七月『四季』立原追悼号への『コギト』同人・『浪漫派』旧同人の寄稿状況を対比すると、『コギト』からは当時の同人十名中、保田・伊東（共にのち十六年一月号より『四季』同人）・田中（十一年二月号以来、同前）の三名、『浪漫派』からは終刊時の同人五十一名中、芳賀檀（十三年四月号以来、同前）・保田（前述）・伊東（同上）・三好達治（創刊以来『四季』同人）・若林つや・阪本越郎（十二年十一月号以来、同前）・神保光太郎（十一年二月号以来）の七名である。両誌の同人は重複もあり、同人総数の大差もあって、厳密な比較にはならないが、強いていえば——或いは感じとしては、立原の側からの執筆件数の大差に比べれば『浪漫派』側の反応は決してとくに冷たくはなかつた、とは云ってよからうか。云いかえれば、立原の執筆件数（＝両誌からの依頼回数？）八対一（「かるやかな……」は（二）で一件として）という大差が、立原に対する両誌の親疎感・重視軽視といった本質的理由によるものとは判断し難いのである。

何事も突き詰めて行けば偶然ではない、というふうにも云えるけれども、日常普通の用法では偶然といえるような事情から、立原の『コギト』執筆の機会が早い時期に生じ、そのまま何とない成り行きで時折の執筆が断続し、死後顧みれば『浪漫派』との大差がついていた、といったことだったのかも知れない。かも知れない、とは無責任な様だが、対応する立原の側に両誌の差違にまで及ぶような仔細な認識がことの始まりから存在していたとは考え難い事からの、類推もある。

——そもそも立原がエコールとしての日本浪漫派、或いは個々の保田・芳賀らにはっきりした関心を持ったのは何時頃まで溯って確認し得るか、という点、十三年一月下旬のものと思われる（堀内達夫氏、角川版六巻本立原道造全集第五巻編註）前出『古典の親衛隊』受贈の礼状中に、同書所収の「別離」（同書第一章）や「別離の悲歌」（第三章）と「嘗てめぐりあつた日のこと」が、慰さめにみちた追憶となつて「蘇つて来る、という一節があり、言葉通りにとれば立原は『親衛隊』（昭12・12富山房刊）以前に、初出誌上でそれらを読んでいたことになる。それも、何ヶ月という程度の以前では「嘗て」「追憶」という言い方が少々大袈裟すぎるので、それぞれの初出時点（九年六月『現実』、十年八月『エルンテ』で読んだものとすれば礼状の述懐は素直に聴ける。しかし、「別離の悲歌」の初出については同号が立原のかねて鐘愛するリルケ特集（『エルンテ』は東大独逸文学研究会の編集）であり、又後述する様に立原の芳賀への関心がぎりぎりの線で十年夏迄は溯らせ得ることで可能性は十分あるが、九年四月創刊・同八月終刊の第一次『現実』は旧ナルプ（日本プロレタリア作家同盟）のMEMBERを主体とし、単純に色分けすればプロレタリア文学系の雑誌と見られていた筈である。立原は一高時代（昭6〜9）から「プロレタリア文学でなくとも、リアリズムそのものに対してすら絶えざる反感と憎悪を抱いて」いた（杉浦明平「立原道造の進歩性と反動性」、『南北』昭22・4）と云われ、事実「君は『日曆』がすきかも知れないが、僕は、高見順はじめみなきらひです」（昭11・5・12杉浦宛書簡）とも書いていて、その立原が、そうした『現実』に対して、雑誌自体の読者だったとは考え難い。では掲載誌への好悪に係らず筆者の名によって手に取られる程度に、当時既に芳賀への関心があったのだからか、といえ、むしろ逆の傍証がある。

十年夏、立原は「神保光太郎氏にたのまれて」（10・9・4猪野謙

二氏宛書簡）『コギト』九月号に初めて寄稿するのだが、その際、神保から同誌六月号の送付を受け、室生犀星から八月号を借覧している（10・8・6神保宛書簡）。この夏立原は七月二十日過ぎから富士見・長野・上林温泉と信州を旅して信濃追分に到っており、『コギト』旧号を人から入手しているのは長く旅先に在る為とも考えられるが、その折の次の様な幾つかの書簡はやはり立原が『コギト』の読者といつたものではなかつたろうことを示唆する。即ち、日付順に並べると

①（7・27柴岡玄佐雄氏宛）「コギト」といふ雑誌を知つてゐる？あれの八月号に辻野久憲といふ人が書いてゐる「旅の手帖」といふ文章のなかの「母の便り」といふ章を、本屋で、立ちよみしてみたまへ。

②（8・5猪野謙二氏宛）先日、コギトの六月八月号を手にしてよんだが、中に就て、ナポレオン（引用者注。芳賀訳、エルンスト・ベルトラム「ナポレオン・ボナパルテ」）は面白かつた。保田といふ人の小説（六月号「等身」か？）は思考は純粹なのであつたが、小説として濁つてゐた。あれは小説でないのであらう。僕が小説としてよんだのかも知れぬ。だが、一体保田といふ人の文章はいひたいことがありすぎて、殆どあわててゐるやうな思ひがするのだ。天平、白鳳を背負つてゐる彼の姿は、まためづらしくもうつくしいのだ。それ故に過剰な氾濫が不吉な思ひを強いるのだつた。

③（8・6神保宛）保田さんの文章はあんまりたくさんのことが書いてあるので、よくのみこめないとこもありませんでしたが、面白うございました。詩では、「部落」（六月号、神保）と「追憶」（八月号、津村信夫）がすきでした。ほかの詩（六月号伊東静雄・小高根二郎、八月号田中克己・伊東・小高根・蔵原伸二郎）はどうしてあんなにむづかしいのでございませう、僕にはつきりとのみ

こめないのです。

④(8・7津村信夫宛)「追憶」をこちらでよみました。(略)後半分ははつきりわからないのです。でも全体はすぎでした。同じ雑誌のほかの詩はわからないのが多く、むづかしいので、わかりませんでした。

等とあるが、①②の「……といふ雑誌」「……といふ人」といった云い方から、『コギト』やそのメモバア(「旅の手帖」は五月号からの連載だが保田の方は創刊以来毎号執筆)の名がこれまで立原の周囲の話題には殆ど上っていなかったことが察せられる(辻野は十一年二月号から立原と同じ『四季』同人となるが、『四季』への寄稿は十年六月号が初めてである)。②の「手にして」読んだと殊更云うのも、立原の平生と『コギト』の疎遠、又そのことについての友人の認識を、反映していようか。②③で保田文(六月号の「等身」にしろ八月号の「有差の詩」にしろ)の通有性といえる(保田の読者には事新しく云うまでもない)点にこだわっているのは、立原の保田に対する馴れの不足か、少なくとも神保との間では保田が話題となっていなかったことを示唆しまいか。③④の『コギト』掲載詩の詩風への違和感(除外された神保・津村は書簡の相手という他に、津村は立原と共にいわゆる『四季』派の詩風の代表視される一人だった)の表白も、それが新たな認識だったからではないか。

そもそも今回の立原への寄稿依頼が『コギト』同人という訣ではない神保から伝えられ、神保に仲立ちを頼んだ(のであろう)『コギト』内部の者との直接交渉は遂に無かったらしい(前引神保宛書簡に「丸山さん(薫)にコギトの詩のことたづねました所、出来たなら神保さんにお送りすればよろしいとのことでしたので」と、又8・12津村宛に「神保氏からたよりあり、原稿、保田氏の方におくつたといふことでした。没書などにならなかつたのでせうか」とある)ことも、示唆

的に思われる。

そして②での保田文と芳賀の訳稿への言及し方の差も、見逃せまい。前者には百数十字を費しながら後者は「面白かつた」で済ませているのは、一往、創作と翻訳の重味の違いということも考えられるし、量的にも保田文は(「等身」と仮定して)二十八頁に及び本号最長篇、芳賀のは六月号が十七頁、八月号は十頁と大差がある。もっとも、二年半後の『親衛隊』受贈礼状の中では立原は

私は「方法論」(『日本浪漫派』昭11・6・13・8断続掲載)や「ナポレオン」(昭11・7まで断続、及び12・6)のひらいてある窓から、その(『親衛隊』の)世界を嘗つて窺つたことがあるとおもつてをりましたが、

云々と、さきの「別離」「別離の悲歌」同様「ナポレオン」についても初出誌で(当時単行書未収)の感銘を述べており、②での保田文に比しての劣勢はあくまで保田文に比してのことだったかと思われるが、更に詮議すれば感銘したのは十年六月・八月号掲載分ではなくそれ以後の章かも知れないし、二年半の間に立原の読み取りが変化することもあり得る訣だから、『親衛隊』礼状で②書簡を補うのは適切でないかも知れない。

それはともかく、②での差の中で言及の深浅や分量の多寡は対象二文の広い意味での内容の差によるものと考え得るとしても、「中に就て……面白かつた」とそれなりの注目はされている芳賀訳が、その訳者の名を記されないのは、右の理由だけで納得できるかどうか。「ナポレオン・ボナパルテ」は六月号が初掲載だから、訳者名は「一々書かなくても判っている評判作」ということでもない。保田の「小説」が、作品題名か作者名を云わねば紹介にならないものの云うのはどちらでも大差はなかったと思われるのに対して、芳賀文の方は縮約題名ヘナポレオンが作品の主題も示してしまふ為、訳者名より便利と

いえ、そちらによって紹介がなされ易いということは考えられる。しかしそれだけでは済まないで、②書簡での「」抜ききのナポレオンという表記は固有作品名から半ば（以上）主題人物名に転じている用法と考えられるから、作品名を通じての間接的な作者の存在さえもここでは薄れている訣である。或る人物が、屢々念頭に浮かぶと迄は行かなくても、その存在が認識されている場合、その人の作品ということもその人が何と名づけた作品かということも消去されて、主題が何かということだけが口の上というものは、自然な事だろうか。

「……といふ人」と紹介される保田と、その名を消された芳賀との、どちらが立原にとってより無縁の者だったかという比較はともかく、ことを芳賀に限って云えば少なくともかねてから注意を払っていた相手とは到底考えられない。話を元に戻せば、これと前後する時期の十年八月発表の「別離の悲歌」はともかく、一年前、九年六月の「別離」が芳賀の署名ゆえに目を通されていたとは考えられないのである。そして更に話の発端に返れば、十年夏に作品依頼を受けるまでの立原は『コギト』に対し芳賀・保田らに対して『日本浪漫派』に対しては一層——後述——路傍の人だったと思われる。

II

ところが、寄稿を契機として一旦識った後の『コギト』に、また保田らに、立原は急速に魅せられて行つたようだ。最初の接触の二月後、十年十月十四日付の生田勉氏宛書簡には、氏の同人誌『未成年』加入を歓迎する旨を述べて

與重郎のごとき文章をひつさげて、天下にまみえよ。

とする。即ち保田を以て世を瞠目せしめる登場の手下とした訣だろうが、その保田を中心とする『コギト』掲載の、但し、むしろ保田以外の諸家の作物への共感・傾倒は、既に前引十年八月五日の猪野氏宛書

簡に始まっている。「ナポレオン」及び保田文の印象を記す前引部分の、一つ前の段落で、継ぎ穂なく

八月四日、ヘルデルリンは日記に、過度の孤独は自己を破壊する、適度な孤独に於て、淨福な生活を営み得ると誌してゐる。さうしてシュレーゲルのうつくしき文章をひいてゐる。この適度の孤独、あこがれられてゐるのはつね日頃これであつた。だがそれはいかにして、自分にまで与へられるか。荒野に打捨てられた鉄の意志であらうか。あらゆる生活はすべて意志によつてのみ得られるのだ。意志こそ、現代の求められた芸術のモメントであらう。

と書くのだが、ヘルデルリンの日記云々という唐突な言及は、じつは次段に「先日、コギトの六月八月号を手にしてよんだが」（前引）とある、その八月号所載「ヘルデルリン日記抄」（松下武雄訳）の読後感と思われる。「過度の孤独は……営み得る」という引用の原拠と見られる訳文が若干言い廻しが異なるのみで右「日記抄」八月四日の条に存し、立原自身の文章である「鉄の意志」云々も同条末尾のしかし一体私は何処に適度な孤独を求めることが出来るか。スピノザの孤独は荒野に打ち棄てた鋌の意志を必要とする！からの展開と見てよかるう。

ところがこの立原文の成立経緯をそのように想定した（せざるを得まいが）場合、右に引いた「八月四日、ヘルデルリンは日記に……」という書き出しは些か奇妙である。確かにヘルデルリン日記中の孤独論は八月四日付で誌されているが、単純普通にヘルデルリンがいつそう書いているのかを云いたいなら、月日以外に年次も云わねば無意味だろう。「日記抄」原文は表題の下に（一七八九）と添え書きしてあるが、立原は「日記抄」に拠つたことを自分の口からは遂に云っていないのだ。それに、ヘルデルリン日記がじつはそこに載つ

ている『コギト』八月号を「手にしてよんだ」ことはこの後に出て来るのだから、素直に読めばヘルデルリン云々は『コギト』同号所載以外の読後感と受け取れる筈である。第一、何かの読後感を述べる時、たとえば日付が重要な要素である日記の読後感だからといって、いきなり日付を挙げることから始めるだろうか。へヘルデルリンの日記を読んだら八月四日、……と続けるのが、少なくとも相手の理解を念頭に置けば最も通常の順序だろう。相手の理解の便など考えに入れて来ない衝迫の中での叙述、と想定しようとしても、その次の芳賀・保田評の前には「先日、コギトの……よんだが」と、悠長とさえいえる説明的前置きが挿み込まれるのである。

この立原書簡が八月五日のものであることから考えると、その本文の途中に出て来るこの八月四日という日付は、或いは、ヘルデルリンが日記に孤独論を記した日付であると同時にその日付部分を立原が読んだ日付でもあったのではないか（長い書簡を書く癖のある立原には、書簡の途中でここ迄はいつ書いたといった註を加える例はそう珍しくない）。へ八月四日、ヘルデルリンの日記を読んだと、（日記を）読んだ日付を記すのならごく普通のことであり、それを承けて、その読んだ（日記の）部分の日付をへ八月四日、ヘルデルリンは……誌して……と、二つの行為のなされた日付をそれぞれに示すならば混乱はない。だが、ヘルデルリンの執筆と自己の繕書と、二個の思索の日付の偶合に興をおぼえた（大袈裟に言えば運命的なものを感じた？）立原が、両行為——両行為者——を一体化して誌したのがこの形だったのでなかろうか。

それはともあれ、この日記の筆者 Friedrich Hölderlin も、その中の引用文をへうつくしき文章と讃えられた Friedrich von Schlegel も、独逸浪漫派の代表的詩人・評論家（もともとヘルデルリンの方は「古典主義に安住することはできなかったが、ロマン主義にもおさ

めきれない大きい存在」（『手塚富雄』ともいわれるが）であり、『コギト』『日本浪漫派』に共通して好尚されるところだった。例を保田にとれば「卒業論文にヘルデルリンを書いた彼が大学時代「ヘルデルリンに重点を置いて、ドイツ浪漫派を理解し、愛していたことはたしかだ」とする説（昭46・4潮出版社刊、伊藤佐喜雄『日本浪漫派』）さえもあるし、『コギト』九年十一月号の独逸浪漫派特集には三篇のシュレーゲル論の中的一篇として「ルツインデの反抗と僕のなかの群衆」を書いている。そのヘルデルリン、或いはシュレーゲルに、立原は、保田・芳賀や『コギト』への親近と同時進行（やゝ遅れはするが）的に、共感して行ったものようである。一年後、十一月九月号『コギト』に発表した「かるやかな翼ある風の歌」では既に、

青年の心ははげしく渴いて友を呼んだ。
ノヴァリスも風となれ / ヘルデルリンも風となれ / 萩原朔太郎も風となれ

そこでノヴァリスもヘルデルリンも萩原朔太郎も風となつた。（略）それから、神保光太郎も、沢西健も杉浦明平もクラブントも、檜山繁樹も猪野謙二もみんな美しい風になつてゐた。（Ⅱ）と、『四季』の最長老萩原以下立原と個人的交際のある人々（Klabund, 1890～1928を別として）にノヴァリスやヘルデルリンを並べて戯れる（昭11・8・10神保宛書簡に「けふ コギトの分書きをへ（略）そのなかで 神保さんも風にしてしまひました」とある）に至っている。或る対象への親近共感というものの本来あるべき状態からすれば決して奇異ではなく、むしろ当然でさえあるが、しかし実際には容易に望めないそのあるべき形で、立原の『コギト』etc 親近は『コギト』etc 止まりでなくその先の『コギト』の親近対象をも共通の親近対象化してゆく。いわば同一頂点に向かう三角形の二辺の関係を、『コギト』etcとの間に併せて作って行くのである。

『コギト』に比べて発刊の遅かった『日本浪漫派』への直接の関心が表われてくるのは、前述『コギト』との初めての接触の翌年、十一年半ばに至って^(註3)。

日本浪漫派・二月月号に「偽画」以来の友人沢西健が、「朔とトミ」を書いてみた。「黒手帖」、「四季」昭11・5)とか、

神保光太郎氏の詩は僕もすきです。最初のころの「日本浪漫派」や古い「四季」によい詩があります。(昭11・6・18田中一三氏宛書簡)

などの言及が見える。しかし前者の場合は「去年の初夏、ゲエテの親和力をよみながら沢西はこの小説のことを考へてみた。そして親和力をよみをへると書きはじめた。夏のころ毎日毎日書きつづけた。秋になり出来上つた」といった経緯を、立原は「その間中ずつと手紙や話で」聞いていたのであって、「二月月号に……書いてみた」等と言つても同誌をめぐってて発見した訣ではなさそうだ。恐らくこの友人の作品を読むために、それが載っている(筈だ)から雑誌を手にしたものかと思われ、それ以前、又はそれ以外の、雑誌自体への関心・閲読意欲を想定する根拠はない。

後者についても似た事情は考えられるのであって、「最初のころの『日本浪漫派』」と云つても創刊(昭10・3)から未だ一年三ヶ月しか経つてはいないが、第一年度には神保は第一号から第五号(七月)迄の月号と十月号とに詩を載せている。従つて立原の言葉を信ずれば遅くとも創刊後半年経つか経たぬ頃、既に『浪漫派』に目を通していたことになるが、ここでの『浪漫派』もかねて辱知の、『四季』同年二月号で立原と並んで同人として紹介されてもいる神保の詩の掲載誌として挙げられているので、雑誌自体への注目とは即断できまい。右引用部分に続けて『マグラデナ』といふ詩と『部落』といふ詩が一

番好きだ、と書くのだが、前者は『四季』十年月号、後者は『コギト』十年六月号掲載作で、「よい詩があ」といった二誌の中『日本浪漫派』の方は掲載作を具体的に示されていない。「マグラデナ」への注目は遺稿ノオト(スケッチブック)の中に「津村信夫と王朝のリック。(略)彼の Lyrische Roman のいつはりなること。/ 神保光太郎の『マグラデナ』に比較せよ」ともあり(堀内達夫氏は十一月月上旬の記載と想定)、「部落」の方は前引十年八月の神保宛書簡でも好感を示されていて、詩の題名の方には記憶の誤りは考え難い。とすると掲載詩名の方を、『コギト』と『日本浪漫派』と思い違ひしたものだろうか。そしてこれとは別に『浪漫派』誌上で神保詩(「部落」以外の)を見、感銘したことが、果たして実際にあったのかどうか、確証はない。

しかしもう一方の『コギト』に対しては、右のような『日本浪漫派』への「疎遠」を偶然としか思わせない程、旧号にも溯つて渉猟したらしい結果が立原の作業の上に次々と顕現して行く。

十一年七月、東大工学部建築学科の親睦会誌『建築』に発表した小評論「住宅・エッセイ」では、「建築に対して浪漫派風な思ひの必要」を提唱して、「浪漫派のことに就ては、たとへば、ワルター・フオン・モーローの『独逸浪漫主義』などを見られよ。この論文には神保光太郎氏による邦訳がある」と註解するが、この神保訳とは『コギト』九年十一月の独逸浪漫派特集の一篇として掲載されたものである。

十一年十二月提出の卒業論文「方法論」になると、長文のせいもあるが『コギト』への依拠は著しく、九年三々五月号掲載の薄井敏夫氏訳・シュレーゲル「フラグメンテ——『文芸のリッエウム』より」^(註4)八年八月号以降十一年十二月号迄の間に二十五回断続的に掲載(以後も続稿)された松下武雄氏訳・シェリング「芸術哲学」が、

それぞれ引用されている。更に関連项目的には、十年頃(?)保田が伊藤佐喜雄に「判断力批判」と並べて推奨したという(伊藤『日本浪漫派』オスカー・ベッカア『美の果無さと芸術家の冒険性』(立原論文で参考書目に掲げる湯浅誠之助氏訳は昭7・4理想社刊)や、十一年十月『思想』掲載の芳賀論文「ヒューマニズムに就いて」に引かれたヘルデル「イデー」の一節を引用し、論文末尾で「いろいろな意味で指導し助けて下さった畏友」の筆頭に神保・保田の名を挙げて

いる。

この建築学の論文で立原は考察対象の選択が「出会ひ」として把握されることに「無限の信頼」を置くが、そのことに註して「一八〇八年十月二日のナポレオン・ボナパルテとゲエテとの」それを「出会ひ」の「最高の形式」として挙げる。この「出会ひ」という語自体、そもそもが「芳賀の発明した」言葉で「出会と別離という」「芳賀の評論の一つの重要なテーマ」を荷うもの(中谷孝雄「忘れられたり無視されたりしていること」、『解釈と鑑賞』昭54・1)とされる、いわば芳賀語彙の最たるものの一つであったが、ここでその典型とされるナポレオンとゲエテの「出会ひ」は、保田「セント・ヘレナ」(『コギト』昭10・5、のち昭11・11人文書院刊『英雄と詩人』にも収録)や芳賀の前出「ナポレオン・ボナパルテ」で情熱をこめて語られた、(『コギト』「好み」といえる事例であった。もつともこの事例は必ずしも芳賀・保田文の導きにのみよるものではなかったかも知れず、立原は芳賀・保田各文の初出より早く十年二、三月の断章に

僕は、フランスの活動(写真)は大体きらひだよ。/それよりか、ナポレオンに勧誘されて高い山の上にのぼつた男のはなしはどうかね?——ロビー——雪の炎は切なく美しい。

(10・2・15中村整氏宛書簡)

ナポレオンの帽子は黒い絹帽子で小さな赤白青の三色旗と金色の

星が三つついてゐたこと。

(遺稿ノオト、想定10・3・31の記載)

ドストエフスキの心理解剖の、詩人への有害無益。あのやうに解剖された小説よりも、ナポレオン伝へ。(同)

といった、最後のものを除いては余り客観的必然性の受取れない——ということとは即ちナポレオンへの「趣味」を想わせる、言及が見られる。或いはそうした下地があったからこそ、一節に引いた十年八月の書簡で筆者が誰かを抜きにして「ナポレオン」に興味を示すといったことにも成ったのかも知れない。

後半、第一詩集『萱草に寄す』の献呈を希ったり(想定12・7・28神保宛書簡、他)するに至る Catossa の名が、突然パセティックな文脈の中で呼ばれるのも、卒業論文「方法論」の進行に恐らくやゝ先立った(11・11・1柴岡玄佐雄氏宛書簡に「論文もそろそろそのジステムは結晶して来る」とある)この年九月末のことである。

ハンス・カロツサといふ人のことを知りました。カロツサのことを考へてゐます。(11・9・30寺田透宛書簡)

折から十月号『コギト』が「ハンス・カロツサ特輯」を組んでおり、カロツサのことをへ知った」という立原の言い方は右特集により或る程度組織的な認識を得たことの謂にふさわしいかと思われる。カロツサ云々の前文に「けふは暴風雨が来るときいてゐます。決意の日と心にきめてしづかな月の光を眺めてゐます」と、これも「芳賀の発明したものではないかも知れないが、芳賀が流行させた」語の一つ(中谷孝雄、前引)という「決意」が取って付けたように用いられていることは、この推測を支持しよう(勿論、この特集には実際に芳賀も執筆している)。

但しこの辺で確認して置きたいのは、『コギト』又は『コギト』系(エコールとしての日本浪漫派と言つてもよいのだが、雑誌『日本浪

「曼派」の姿はまだ鮮明に浮かんで来ていないので）への涉猟や撰取・依拠と謂っても、それはあくまで立原の求めるところと個々の作物の持つものとの合致による、一回一回の共感の継起なのであって、その継起が人目をひく程頻繁であったとしても、主体性の溶け去った盲従随順とは、この時期なお、ほど遠かったことである。

例えば、前出シュレーゲルの代表的小説作品「ルツィンデ」は、早い頃の保田が深く傾倒して「われわれも同じく夢想や放蕩に与かる権利があるというようなことをくりかえし書いた」といわれ（野田又夫氏「ユギト派の人々」、『ユリイカ』昭50・10）、『ユギト』では八年八月から九年一月号まで薄井敏夫氏の訳も載った、因縁浅からぬ作品だが、立原は十二年一月七日の田中一三・生田勉氏宛各書簡に「寝ころびながらルツィンデを読んでいたところへ両氏の便りが届いたので「本を投げ出して」（田中氏宛）喜びに浸った旨を書いている。生田氏宛書簡にはその後ノブリスの抒情詩「夜への讃歌」や新劇公演「昆虫記」「ウィンザアの陽気な女房たち」の話が出て来るが、「ルツィンデ」についてはそれきり感想も洩らされずじまいである。立原書簡の他の例（たとえば本稿1節の十年八月書簡①②でもよい）からみて、相手が不案内な書物や作品については多弁を慎しむといった抑制は乏しかったと思われ、「ルツィンデ」に関しての尻切れとんぼは相手への配慮というより立原自身が興を引かれなかった為だろう。保田の肩入れも立原に頁を繰らせる所までで、それ以上、感興の受け売りや共感の錯覚に引き込むには至らなかった様である。

そしてこの頃漸く、雑誌『日本浪漫派』に対して、一冊まるごとに近い形で——即ち雑誌自体に対するものと見うる関心が表われてくる。十二年一月十二日の神保宛書簡に

けふ「浪漫派」をよみました。保田さんの本のことを書いてある文章、だれのもみなうつくしくて、快くおもひました。

とあるによれば一月号保田論特集の全執筆者のものに目を通したごとくであるが、しかしそうなくても、同じ書簡の中で伊藤佐喜雄の連載小説「花の宴」（昭10・12・12・3）は「僕ら世代の名作」とまで称賛しながら詩については

「浪漫派」の詩はつまりませぬね。詩が溶けて みな二段組の文章のなかにはいりこんでしまつてゐるやうな気がして おかしくおもひました。

と（1節所引十年八月書簡③④参照）、包括的かつ根本的に、詩の散文化又は随筆化をでも云いたらしい却け方をしている。これは『浪漫派』系の小説家と詩人の格差よりも、立原が詩観に於てはより非妥協的だった故かも知れないが、それぞれの賞揚と排斥の理由やその当否は今措く。立原のいわゆる日本浪漫派接近が、現象的にはかなり偶然かつ外発的に生じ、その後は急速に進展したが、その間も日本浪漫派エコーへの自己投企などとは異質の、個々の作物に対する自己の文学的好尚の選別結果として、それがなされたのだということ。——これがおよそ、屢々大跳躍点として取上げられる十三年初の『古典の親衛隊』受贈まで（少なくとも）の実態だったことを、まず、基本的認識として共有したいのである。

註1 この詩の追悼詩としての性格については小高根二郎氏に

立原に捧げたのは、彼の死にたまたま出会ったという偶然からで、主体性はあくまでも伊東自身にある。伊東自身の記念——たまたま転職を意図した上京で、立原の死の枕頭に佇んだ結果になったという思い出のために、立原に捧げたのだ——ということになる。

との解説がある（昭40・5新潮社刊『詩人、その生涯と運命』）。

2 但し「僕が小説としてよんだ」云々は立原の反語かとも思われ、例えば神谷忠孝氏は「等身」を以て「保田與重郎の十六篇の小説の中で私小説にもっとも近い」「集大成ともいふべき」もの（「保田與重郎の小説」、

昭和54・9 雁書館刊『保田與重郎論』としている。

3 『四季』十一年二月号掲載の「愛する神の歌」に津村信夫の同題詩集の評として「傷つかないうち彼は言葉に身を凭せることを諦めた。傷ついて捨てたのではない。ここに彼がすこしも浪曼派的でない所以があった」(傍点引用者)とあるが、ここでの「浪曼派」はその前文中の「言葉の持つ観念美でなくて、もつと物質的な、言ひかへれば世俗的である、人生派風な明るいほひ」と対照して云われており、『日本浪曼派』を特定してはいないと思われる。

4 立原論文の「緒論」末尾の註では「F・シュレーゲル『文学のリツェウム』(薄井敏夫氏訳)」とする。

5 立原論文第二章の註に「以上のシェリングの『芸術哲学』よりの要約は専ら松下武雄の訳によつた」とある。

6 立原は原著からの引用か邦訳書からか明示していないが、芳賀論文中の訳文とは一個所順序が入れ替わっている以外殆ど同文といえる。

(昭58・3・21稿)